

## 「被災地支援ボランティアに参加して」

8月8日(月)から12日(金)までの5日間、日本キリスト教団 西東京教区主催の被災地支援ボランティアに参加しました。2004年に起きた新潟県中越地震の時以来、7年振りの参加となります。今回は特に、被災地の広さと大きさに驚きました。

私が参加したチームは3名の牧師を含む総員12名という、ちょうど動きやすい人数で、主にある豊かな交わりと貴重な体験をすることができました。メンバーは老若男女様々な人たちで、青山学院大学からも私のゼミ生が参加する等、世代や背景を超えたユニークなチームとなりました。

ボランティアの活動は、東北教区被災者支援センター「エマオ」を拠点に展開されています。大震災から半年以上が経ち、活動内容も時々刻々と変化しています。私が参加した時は、仙台市若林区七郷と石巻市の2つの地域で活動が行われました。まず七郷ですが、活動場所には自転車を約45分ほど漕いで現地へ向かいます。震災によって多くの命が奪われたことを悼み、台湾の教会から電動自転車が沢山寄贈されました。また西東京教区からも、マウンテンバイクが15台寄贈されています。幾つかのグループに分かれ、それらの自転車に乗って活動場所へと向かいます。「エマオ」は仙台市の中心にあるので、最初はビルの谷間を縫って自転車を漕いで行くのですが、しばらくして仙台東部道路を越えると、突如として光景が変わります。後で伺った話では、この大きな高速道路によって津波はせき止められたそうです。まさに生死を分けた境界線と言えるでしょう。

活動場所となった七郷の近くには荒浜がありますが、この海岸には津波の後、約300人の遺体が打ち上げられたそうです。白い砂浜の海岸に立つと、この美しい海が突如として牙をむき、巨大な津波に変わったことなど到底信じるできませんでした。大自然の美しさと共に脅威を感じました。七郷では浸水によって荒れ果てた畑の復旧作業を行いました。牧師も信徒も一緒に作業をし、被災地の復興のために共に汗をかくのです。気温は連日35度近くまで上がる炎天下でのワークとなりましたが、東京のように湿度が高くないのがせめてもの救いでした。水が2リットル入った大きなペットボトルをそばに置き、熱中症にならないよう、水分の補給に気をつけながら作業をしました。

一方、石巻にはワゴン車を約2時間掛けて運転し、活動場所へと向かいました。大きな漁船が陸に乗り上げていたり、数え切れないほど多くの自動車がピラミッドのように積み上げられていました。これらの自動車は、所有者が名乗り出てこないと思分できないそうです。また、亡くなられた方の数があまりにも多いため、火葬では間に合わず、土葬が行われた場所の近くをワゴン車で通りましたが、看板に「撮影禁止」と大きな字で書かれていました。心ない人たちが興味本位で写真を撮り、ご遺族の気持ちを逆撫でしているとのことでした。

石巻では一人暮らしのご高齢の女性のお宅で床板を剥がしての泥だし作業をしました。また、その近所のお宅の庭にある側溝から泥だしをしたり、ヘドロ掻きをする等、様々なワークをしました。それぞれのお宅で歓待していただき、休憩中にはとろてんやアイスクリーム、西瓜や自家製の紫蘇ジュース等をご馳走していただきました。人と人との繋がり・触れ合いの素晴らしさを痛感し

た日々でした。

また、滞在中の8月11日(木)はちょうど震災が始まって5ヶ月が過ぎた日でした。午後2時46分になると作業を一時中断し、七郷でも石巻でも、ワーカー一同で共に祈りを捧げました。

ある日、ワークをしている最中に、何とも言えない虚しい気持ちになった時がありました。目の前に広がる広大な被災地。その中で一人の人間が、しかも限られた時間内で行えることが、いかに僅かで小さなものでしかないかを痛感したのです。そしてまた、自分が行っていることは何か偽善的ではないだろうか、或いは、単なる自己満足に過ぎないのではないか。そんな思いが頭の中に浮かんだのです。しかし暫くすると、あのマザー・テレサの言葉を想起しました。「私たちがすることは、大海の一滴の水に過ぎないかもしれませんが、しかし、その一滴の水が集まって、大海となるのです」。一人のワーカーが出来ること、それはとても僅かなことです。しかしその小さな活動が集積することにより、大きな効果をもたらすのです。そのことを思い出すことにより、再び頑張ろうという気持ちになりました。

5日間で最も嬉しかったこと、それは、ボランティアに参加したKくん(匿名)という19歳の青年が別れ際に握手をした際、「先生、僕、洗礼を受けようと思います！」と言ってくれたことでした。その後、彼が所属する教会の先生からメールを頂き、Kくんから正式に洗礼志願の申し出があったこと。クリスマスを目標に、受洗準備を始めることが決まったことを伺いました。その知らせを受けた時、嬉しくて涙が込み上げてきました。

参加した一人ひとりの上に、神様の導きとお守りがありますよう、これからも祈ってゆきたいと思います。また、復興には長い時間が掛かることを痛感しました。青山学院大学でもボランティアステーションが立ち上げられ、この夏、大勢の学生たちが被災地へと向かいました。また、西東京教区主催の支援活動を始めとし、様々な教会やグループも復興のために活動をしています。ACFのメンバーの中にも、いろいろなボランティア活動に参加した人たちがいることを伺いました。一つひとつの活動の上に、神様の祝福が豊かに注がれるよう、これからも祈り続けたいと思います。